挨拶から広がる多文化の輪

この特集は、市民編集委員が企画・編集しました。

多文化共生とは・・・
国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築いていこうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと。

ひと昔前と比べると、外国人の方を見かける機会が増えた気がしませんか。「見かけることがあっても話しかけたことはない」という方が多いのではないでしょうか。そのような中、「なかなか外国人と馴染めない日本人、なかなか日本に溶け込めない外国人がいる」問題が聞こえてきます。

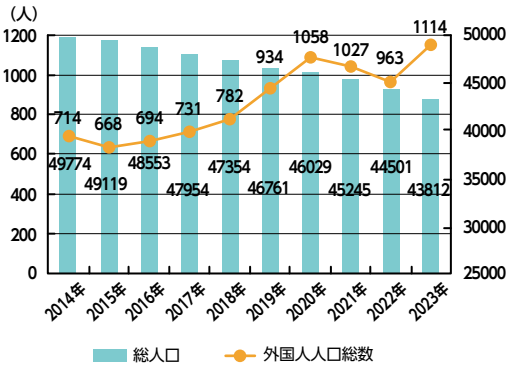
今回の特集は、多文化共生について、市民編集委員の目線で探ってみました。

新城市の現状

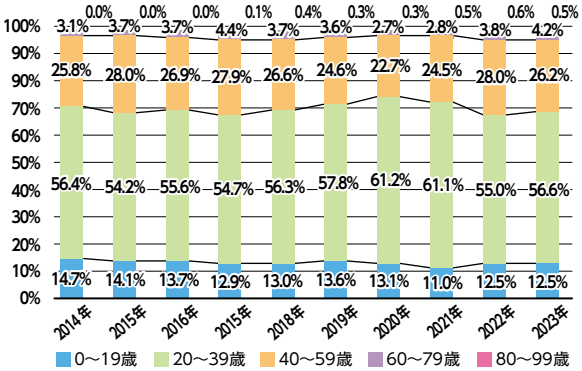
新城市の総人口は減少していますが、外国人人口は増加しています。外国人市民は、今や総人口に対し2.5％の割合を占めるまでになりました。この増加傾向は続き、これからも外国人市民は増えていくことが予想できます。

また、年齢別比率を見てみると、60歳未満の人口が96％前後で推移していることが分かります。そして中でも注目すべき点が、20代と30代の若年層が多いことです。

新城市の外国人人口総数と総人口の推移



新城市の外国人市民の年齢別人口比率の推移



さらに、地域別人口では、人数の大小はありますが、各地域で外国人市民が生活をしていることが分かります。

新城市の外国人人口の上位20行政区の分布

インタビューをしました！

そこで今回、来日し市内の日本語学校に通学しているお二人、新城に住んでいる日本人のお二人から意見をお聞きしました。

※質問と回答は、インタビュー内容をまとめています。

優しさに感謝

父親の夢は日本に行くことでしたが叶わず、その代わりに私が来日することがいつしか夢になっていました。バングラデシュでは土木建築の研究をしていて、最終的には日本で自分の建設会社を起業することが目標です。

1年半程前、市内のお店に買い物に行った際に、道に迷ってしまいました。その時、通りがかった日本人が助けてくれ、その方の車で私を寮まで送ってくれました。その日、祖国の親に電話をかけ感動を共有しました。今でも、その時の嬉しさは覚えています。

▲アシフ・アルさん（バングラデシュ出身）

おもてなしを学びたい

日本の「おもてなしの心」を学び、ネパールで自分のレストランを開業するのが目標です。

学校やアルバイトから多くのことを学んでいます。来年度からは名古屋市の専門学校に進学しますが、目標に向かって、さらに勉学に励みたいです。

来日してから、お餅が好きになりました。

▲タマン・ビニタさん（ネパール出身）

Q 日本に来て驚いたことは何ですか？

時間を正確に守る厳しさです。ネパールでは、大体の時間に間に合えば大丈夫ですが、日本は分単位で時間を守っていて驚きました。私も日本に来てから守ろうと頑張っていますが、慣れてしまった習慣を変えるのはとても大変です。

悪いことをしていないのに、日本人は会話の冒頭で「すみません」「ごめんなさい」と言ってから話し出すことがあり驚きました。外国では悪いことをしていないのに謝ることは珍しいです。この様な相手を気遣う気持ちを見習いたいです。

普段私たちも何気なく使っている会話冒頭での「すみません」。確かに言われてみると、すぐに端的な答えが出てきませんでした。話し相手の時間を割くので「ごめんなさい」と言っているのかなと、お二人に伝えたら納得した表情に変わりました。

Q 日本に来て困ったことは何ですか？

電車の中や道路を歩いていると、少し避けられているのかなと、感じることが時々ありました。また、会話をしているときも、相手の方が少し身構えている感じがしました。

来日する前に日本語をしっかりと勉強してきたお二人。もっと交流をしたいとのことですが、どのように日本人へアプローチしたら良いのか、少し戸惑っている感じがしました。

私たち日本人もどうやって話しかけたら良いのか、質問されたらどうやって答えたら良いのか心配で声かけができないことがありますと伝えました。それなら、お互い様だねと分かり合えた感じがしました。

ごみ捨てに苦労しています。日本のごみ捨てルールは、祖国に比べとても細かいです。ルールに従って出したいのですが、分別が分からない時にすぐに聞ける人が身近にいると、とても嬉しいです。

Q お二人は日本語がとても上手ですが、どうやって学びましたか？

A 来日前と日本語学校で主に勉強しました。さらにアルバイトで日本人の方と話したことも大いに勉強になりました。アルバイトでは、色々なことが学べます。しかし、皆さんがよく使う方言はとても難しく感じています。

本当に日本語が上手なお二人でした。そこで、「じゃんだらりん」について一緒に考えてみました。方言は独特な言い方なため、お二人とも難しそうな表情をしていました。

日本人のお二人にもインタビューをしました

Q 今の新城市は昔に比べ外国人市民が増えていますが、実感はありますか？

A 私たちが住んでいる地域は、外国人市民が増えている実感があります。地域に住んでいる全ての外国人の方の状況は分かりませんが、組に加入している外国人の方もいます。外国人の方々も気さくに組の仕事に応じてくれ、時には近所の人がフォローしながら、みんなでやっています。

近所の外国人市民と立話しの中で、その方が育てているキャッサバは、タピオカやフライにして食べると教えてもらったそうです。何気ない会話から、どんどん話が広がったエピソードを語ってくれました。

Q 全国的にも、ごみ出しの問題はよく聞きますが、実態はどうでしょうか？

A 以前、粗大ごみが放置されていたので、一時的に私の家で保管したことがありました。こうしたことも、分からないことがあれば丁寧にお伝えすることが大切だと思います。地域でも同じような話があり、外国語の看板を現在、準備しています。

Q 今後、外国人市民が増えると思います。何が大切だと思いますか？

A 国や関係機関の取り組みにより、今後も多くの外国人の方が来日されると思います。お互いに協力し合っていくことが、より大切になっていくと思います。

A 新型コロナウイルスで地区行事が減ってしまいましたが、何でも良いので一緒になって何かをすることが大切だと思います。そこから会話が生まれるはずです。会話ができたら、後は自ずと交流の輪が広がると思います。道端で一言声をかけるだけでも全然良いと思います。

お二人が共通して言っていたのが、まずは声をかけてみること。そこが交流のスタートです。

市内で多文化共生の風が吹き始める

例えば、豊岡地区では日本人と外国人が野菜作りを通して交流を深めたり、平井地区では技能実習生との交流会をするなど、お互いの文化を理解し合う試みが行われています。

今回インタビューを受けてくれた市内の日本語学校の卒業生の中には、日本での思い出は野菜作りを通した日本人との交流が一番の思い出と語った方もいたそうです。

インタビューを通して

今は多文化共生の時代とも言われています。現在、新城市では多文化共生プランを作成し、4月からプランがスタートします。しかし、国籍や民族などの異なる人々が互いの文化の違いを認め合い、地域社会の構成員として共に生きていくことは、簡単なことではありません。

今回のインタビューを通し、今後どうしたら良いのか、少し明るい兆しが見えてきた気がしました。

何度も説明をする大切さ

日本のごみ分別は、高度成長期の可燃ごみと不燃ごみの分別から始まり、その後、資源を大切にするリサイクルに変わっていきました。長い年月をかけて私たちはごみ分別の習慣を変えてきました。

それと同様に、文化が全く違う外国から来た方に1回で理解してもらうのは難しいことです。繰り返し丁寧にルールをお伝えすることが大切です。

お互いに認め合う

心の奥底では、「ここは日本だから日本の習慣に従うべき」と思っている方もいるかもしれません。そういった考えももちろんあると思いますが、外国人が日本の文化やルールを守るだけでなく、日本人も外国の文化を理解し、歩み寄ることも大切です。

新城市では、外国人市民が言葉や文化の違いを理由に社会的不利益を被ることなく日本人市民と対等な関係を築き、それぞれの活動や交流を通してまちづくりに参加し、全ての人が住み良いまちを目指しています。

挨拶から始まる交流の広がり

交流の基本は言葉です。外国人との交流では、言葉の違いが大きな壁になっています。人の気持ちを届ける言葉の役割は大きいです。そして、言葉を発しなければ思いは届きません。その人の母国語が分からなければ、日本語の単語を並べたり、ゆっくり話すだけでも大丈夫です。

インタビューを通して、日常の挨拶から交流の輪が広がっていくと確信しました。「恥ずかしい」「関わりたくない」といった気持ちもあるかもしれませんが、まずは話しかけてみることが大切だと思います。

今回インタビューした学生は日本語が堪能でしたが、母国語しか話せない外国人市民もいます。生活に必要な日本語が少しでも分かるようになる機会や、そのきっかけとなる場も必要です。

今回のインタビューでは、何か困った時に気兼ねなく聞くことができる人がいると嬉しいと外国人市民の方は仰っていました。日本人の方は、外国人の方と簡単で良いので交流ができる場が地域にあれば良い方向に進むのではという話をされていました。両者を結ぶキーパーソンが市内のあちらこちらに存在すれば、多文化共生を良い方向に進められると実感しています。

お互いの文化を認め合い、気軽に交流ができる新城市になって欲しいと思います。

▲アシフさん（左から2人目）

▲ビニタさん（右から2人目）

編集後記

「人と人とが助け合う」という、言葉にすればシンプルなことが現実には何よりも難しいと感じる今の世の中、国籍の違う人々と地域で仲良く暮らすことは簡単なことではないかもしれません。

しかし、世界で戦禍が絶えない今こそ、人は皆同じ命であり、「地球」という名の家族であることを声を大にして言わなければならない時でもあると思います。今回の特集が、その一歩になることを願っています。

第12回

ニューキャッスル・アライアンス会議に参加しました！

～in チェコ～

世界各地には、ニューキャッスルというまちが100以上存在します。新城市が世界の「新城」に呼びかけ、第1回世界新城サミットが開催されたのは、1998年のことでした。2008年のドイツ会議で、市民レベルの交流を図っていくことが提案され、2010年の南アフリカ会議から現在のアライアンス会議に発展しました。

今回のニューキャッスル・アライアンス会議は、コロナ禍以降、実に5年ぶりとなる開催で、第1回目からちょうど25年です。今回の会議では、これまでの25年のハイライトや、若者の参入についてなど、様々な会合が行われました。

10/11(水) 派遣団到着

10月11日(水)、19時間の長旅を経て、無事にチェコのノヴェ・フラディに到着しました。

チェコは日本との時差が7時間ありますが、皆さん元気な様子。

ノヴェ・フラディのウラジーミル市長が、自らの運転でウィーン国際空港までお迎えに来てくださいました。赤い車は、4月に購入したばかりの、消防団の新しい車です。

▲無事に到着。会議会場の宮殿の前

10/12(木) 歓迎セレモニーセッション

10月12日(木)、歓迎セレモニーが行われ、各都市の代表者が挨拶をしました。

皆さん、5年ぶりの対面での開催をとても喜んでいる様子でした。

歓迎セレモニーのあとは、ニューキャッスル・アライアンス会議の25年の概要について話し合いが行われ、それぞれの都市が25年のハイライトを伝え合いました。

◀歓迎セレモニー

▼市長挨拶

10/13(金) 一般会議 ユース会議

10月13日(金)、この日から一般(大人)とユース(若者)に分かれて、それぞれのテーマでワーキングセッションをしました。

一般会議では今後のアライアンスについて熱いディスカッションが繰り広げられました。

ユース会議では、アイスブレイクでみんなでゲームをして緊張をほぐした後、「これまでの25年間の交流」を振り返りました。ユースメンバーはすぐに打ち解け、活発な交流をすることができました。

▲ユース会議

「ニューキャッスル・アライアンス会議」報告

10/14(土) マーケットイベント開催

10月14日(土)、ノヴェ・フラディ市内の広場でマーケットイベントを開催しました。各都市が自分のまちを紹介するイベントで、新城市のブースには、約170人が訪れ、新城茶や和菓子の紹介、鳥居強右衛門や新城市の市章などをデザインしたフードデコステッカーの配布や鳥居強右衛門の紙芝居、名前を漢字にして習字で書くなど、多くの方と交流ができました。

市民派遣員の3人は、浴衣や道着、作務衣など、日本ならではの衣装を着て会場を盛り上げました。

▲マーケットイベント

10/15(日) 一般・ユース会議 歴史的名所ツアー

10月15日(日)、午前中は一般とユースと分かれて、ボランティアについてディスカッションをしました。各都市で取り巻く環境や事情が違う中で、どのようなボランティア活動をしているか、情報共有しました。途中、ユースの代表が実際に行っているボランティア活動について、発表する場面もあり、新城市にはないボランティアだったり、外国の若者の活動について知ることができました。

▲ユース会議

▲一般会議

10/16(月) 会議のまとめ 送別会

10月16日(月)、一般会議およびユース会議で、それぞれのまとめを行いました。そして最後は総括して、次の事が決定されました。

❶アライアンスは継続し、2年に一度対面で会議を開催します。
❷次回の開催都市は、ラトビアのヤンピルスです。
❸次回会議のテーマは、「Education(教育)」と「age-friendly city・safer city(老人に優しいまち・安全なまち)」です。
❹重要事項などを検討する本会議に若者代表3人を加えます。

夜は送別会が催され、各都市の参加者は別れを惜しみつつも、大いに盛り上がって楽しいひとときを過ごしていました。

10/17(火) 別れの挨拶 帰国

10月17日(火)、ノヴェ・フラディ市長から最後の別れの挨拶があり、みんなで写真撮影をした後、会議は終了、解散となりました。

新城市は16時間のフライトを経て無事帰国の途につきました。

▲会議終了

▲送別会

今回の会議に参加した、市民参加者3人（一般1人、ユース2人）に、参加した感想を伺いました。

若者にできること

渡邉里奈さん（大学生）

今回の会議を通して、私は多くのかけがえのない経験を得ました。その中でも、自分のまち、そして自分自身に自信をもち発言をする若者の姿がとても印象に残りました。各国の参加者が自分のまちについて紹介している時、彼らの表情はとても明るく笑顔でした。自分のまちだけでなく、異なるまちの文化も積極的に受け入れようとする彼らと交流する中で、新城市の魅力についても再確認することができました。また、議題に対して意見を主張し合い議論する姿から、若者が主体となって自分のまちやNewcastleをより良くしていこうと活動できる場所の必要性も実感しました。私は今回グループ代表として2度全体に向けて発表する機会がありました。今までなら自身の英語力の無さを言い訳にして避けてきた役割でした。しかしながら、私よりも若い10代の参加者が自分の意見を表明している姿に刺激を受け、私自身大きく成長することができました。次の世代を担うNewcastleの若者にとっても、Newcastleアライアンス会議で得られた経験は貴重で有意義なものでありました。

これからの新城市を若者が盛り上げていくためにも、この繋がりを絶やすことなく次の世代に引き継いでいけるよう、Newcastleの良さを発信していきたいです。

世界に触れて視野を広げる

山下優輝さん（高校生）

「自分は日本と世界を繋ぐキーパーソンとして、世界中を飛び回り、日本のインフラを支えていきたい」と、強く思うようになったのは、ニューキャッスル・アライアンス会議を終えた10月中旬のことでした。

5月中旬、私はこの会議がチェコで開催されることを友人に教えてもらい知りました。私は小学6年生の時に新城で開催された会議に参加しましたが、積極的に参入できず、あまり印象に残っていないのが正直な感想でした。しかし英語力には自信があり、普段の高校生活では経験できない海外の環境、そして海外の文化を見てみたいと思ったので応募しました。

6月下旬、派遣決定の連絡があり、ユースの代表として選ばれ、チェコに行くことが決定しました。そこからは、ニューキャッスル・アライアンス会議について学び、また新城の魅力、問題点について自分なりに考え、日本語と英語の両方で表現するなど、準備を重ねて旅立ちました。

迎えた会議で、各国のニューキャッスルのユース代表と顔を合わせた私は、初の海外ということもあって会話を続けることに必死で、まともに自分の意見を言ったり、まとめたりすることが殆どできませんでした。しかし、海外のユース代表は、私の意見を理解しようとしてくれたり、会話の輪に入れてくれたりと、温かく大きな心で接してくれました。そのおかげで私は安心して自分を出すことができ、会議の5日間は充実した日々を過ごすことができました。また、日々の会話の中で各国の事情、文化、歴史などに触れることができて、より多様な視野を身につけることができました。そして私がこの会議で感じたのは、文化が違っても広い心を持って受け入れる大切さです。自分も海外の友人のようになりたいと強く思いました。

帰国後も、海外の友人達と連絡を取り合い、広く世界を見る努力を続けています。今、世界では紛争や貧困問題など、様々な

問題が深刻になっていて、いつ日本も危険が訪れるか分からない状況にあります。そんな時代を生きていく私だからこそ、日本に留まらず世界と交流をしていく必要があると思っています。将来海運業界に携わり、日本のインフラを支えながら広く世界と関わりたいと思いました。

世界へ「一歩踏み出す」勇気

今泉太希さん（社会人）

空港で会ったチェコ人のおじさん（しばらく後にチェコの市長だと気づく）が私たちに最初に言った言葉は、「どぶりぃでんしんしろ！」でした。私は、中学校で英語を教えているので、英語ではないことは理解できました。が、日本語を話してくれているのかチェコ語なのか判別がつきませんでした。咄嗟に「どぶりぃでん」と返すと、にこーっと笑顔で手を差し出してくれました。『Dobrý den』はチェコ語で「こんにちは」という意味でした。

各国の代表の方々とも、『Hello Shinshiro』『Chao Shinshiro』など様々な挨拶を交わしました。気になったのは、どの国の方も私たちのことを「しんしろ」と呼んでくれることです。『Newcastle』ではなく。今回の会議は世界中にある『Newcastle』の集まりだったのでそう呼べば誰でも通じると思うのですが、皆さん「しんしろ」と呼んでくれました。そこからは、新城に住む私たちへのリスペクト（尊敬）を感じました。それだけでなく、会議の中でも各国からの新城へのリスペクトを感じました。このアライアンスの発端となった市であること、ウクライナ難民を救済するために多額の基金を送ったこと、数え切れない場面で私たちの住む新城市が各国からリスペクトされ感謝されている場面に遭遇し、新城を誇らしく思いました。

もう一つ誇らしく思ったことがあります。それは、一緒にチェコへ若者代表として行った2人の世界へ「一歩踏み出す」姿勢です。世界の若者達は、大変優秀でした。自分の想いや考えを明確に持ち、伝えることができる英語力を有し、決めたことをすぐに実行する行動力と小さなトラブルにも柔軟に対応できる判断力を備えていました。正直に言って、私が同世代にこんなレベルの差を見せられたら家から出たくなくなります。しかし、2人は違いました。言語の壁があろうと、積極的に相手と関わり、友好関係を築き上げました。それだけではなく、新城市の魅力を伝え、どうしたらもっと素敵なまちになるのかを世界中の若者と話し合っていました。その姿から、大袈裟かもしれませんが、日本はまだ成長できる、大きくなれると希望をもつことができました。

今回の旅で新城に住む私たちには誇れるものがたくさんあることを学びました。それを未来を担う若者達へ伝えるために、私は一歩踏み出そうと思います。どんな些細なことでもいいと思います。皆さんも一緒に一歩踏み出してみませんか。素敵な未来へ、「どぶりぃでん。」

今回派遣された市民3人、皆さんそれぞれ得たものは大きかったようです。海外で経験したことを、自分のまちに還元していく。そんな素晴らしい体験を皆さんもしてみませんか。

次回のニューキャッスル・アライアンス会議は、2025年の夏に開催する予定ですが、その間にもオンライン交流をはじめ、様々な活動もしていきます。少しでも興味を持たれた方、世界の「新城」と繋がってみたい方、ぜひ積極的な参加をお待ちしています。